

## 「立て直す力」とは

自由と支えはコインの裏表です。自由に生きるためには、自分の中に絶対的な支えが必要なのです。私を支えてくれるものがあるというある種の確信のようなものが、人間を支えるのです。人生が破綻しても、ひどく落ち込んで死にたくなったりしても、無条件に支えてくれる存在がある、ということが人生へのチャレンジを後押しするのです。

上田紀行著「立て直す力」より

今月は、上田紀行(うえだのりゆき)さんの著書「立て直す力」(中公新書ラクレ)をご紹介しながら、窮地や破綻等からの立ち直りや回復などについて考えてみたいと思います。著者の上田さんですが、文化人類学者で東京工業大学教授をお勤めでいらっしゃいますが、様々な分野でご活躍されておられます。ちなみに、私が、上田さんのことを存じ上げたのも、NHK-BSの歴史番組「英雄たちの選択」のゲストとして、独自の視点から卓越したコメントを颯爽と話されているお姿を拝見し、どのような方なのだろうと興味を持ったことが、きっかけでした。

余談はさておき、上田さんは、同書の中で、新自由主義的風潮が支配的な現代社会は、自由でありながら、自己責任が強調され、失敗の許されない社会ではないかと、様々な事例をあげながら、問いかけています。冒頭の一節に続き、「新自由主義が陥った罠。それはその人生の支えを外しながら、自由に金儲けしろと言っているところです。支えを外して、でも『自由』に行動しろと言う。(行替え)最近の若者は夢を持たなくなったな、という声を聞くことがあります。しかしあなたがもし人生にチャレンジして失敗したとしても、誰も助けてくれない。それはあなたの自己責任でしょう。はい、さようなら。他にあなたの代わりはいくらでもいる。結局、使い捨て。失敗したって救わない……そんな状況で、誰が冒険するでしょうか。だから若者は、みんなから評価される可能性の高い、安全なところに身を置こうとするわけです。」と述べておられます。

同書の中で、人間は、何か大きな失敗をしたり、深い挫折を味わったりしたとき、そうした状況から「支えてくれる何か」が必要であることを、「宗教」、「悪魔祓い」、「祭り」などを例に挙げて、これらの「支え」による人間の再生と復活が語られています。中でも、仕事だけの人生ではない、地域活動やボランティア等を含めた「人生の複線化」について、述べられているところに興味を惹かれました。ちなみに、この「人生の複線化」に関しては、私が、県教育委員会で生涯学習部長をしていた時に、神奈川県生涯学習審議会において、駒沢大学教授の萩原委員(当時)が、家庭、学校、職場以外の第三の「居場所」の重要性について、しばしば言及されていたことを思い出しました。上田さんのお考えとも様々な面で共通性があり、あらためて感慨深いものがあります。

最後に、同書を読んで、少し気になることがあるのでお話ししたいと思います。それは、同書の「自由」には「支え」が必要であるという趣旨に関して、論旨は異なりますが、ドイツ出身の社会心理学者エーリッヒ・フロムが、その著書「自由からの逃走」の中で、ナチズムは人々が「自由」という重みに耐えかねて選択した結果であると結論づけていたことをふと思い浮かべたことです。現代は、ナチズムやファシズムが席捲した当時の時代状況とどこか似通ってきているのではないかと、漠然とそんな危惧を感じています。

令和6(2024)年8月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス  
理事長 松井 聡 明